

第2次小学校令期における単級教授論 の紹介導入と展開

——「単級」と「合級」の理念上・概念上の識別と
教授方法論における折衷——

Introduction and development of the theory of one-class school
teaching in the period under The Second Primary School Law.

麻 生 千 明

序論 ドイツ等の単級学校の紹介導入

明治13(1880)年刊行の『平民学校論略』(Die Praxis der Volksschule, 村岡範為馳訳)の「附録」に「無級平民学校」(Ungeteilte Volksschule)と題し紹介されたのが、わが国への単級学校紹介の最初であるが、第1次小学校令期に入ると明治21(1888)年、木場貞長によってドイツの単級学校を紹介した『日本独逸合級小学校』が発刊されたり、翌22(1889)年には山田邦彦によって『単級教授法』と銘打つ著書が刊行されるなど、単級学校についてのより積極的な紹介及び論及がなされるようになる⁽¹⁾。そのような動向は教育雑誌記事においても明瞭に窺える。次表は『教育時論』『教育報知』『大日本教育会雑誌』等、当時の代表的な中央の教育雑誌において記事の見出しに「単級」または「合級」を明記した記事数を年度別に集計し一覧表にしたものである。(次頁掲載)

その表において明治19~20(1886~7)年の『教育報知』に「単級」と銘打つ記事が集中していることが判るが、それらは「独逸国ジュッセルドルフ縣単級小学教則」及び「単級小学校 ケール氏教授論抄訳」と題するドイツの単級学校の実態や論説動向を紹介⁽²⁾した記事であり、そうした紹介を通して、府県によってはドイツの単級教則を摂り入れた実践が試みられるなど⁽³⁾実に刊目すべき様相が呈されつつあった。この明治19~20(1886~7)年頃、すなわち第1次小学校令公布直後あたりを単級学校紹介導入の第1のピークとすれば第2次小学校令公布後の明治20年代半頃は第2の、しかも本格的な単級学校紹介導入の時期であると言える。「亜米利加英吉利風の教育学説漸く世人の嫌厭する所となりて、独、仏、奥の如き欧人の謂ゆる大陸の学風と称するもの漸く盛んとならんとするに至れる」⁽⁴⁾と雑誌「社説」にも伝えられる明治23(1890)年頃の思潮動向のなかで、ヨーロッパ特に

中央教育雑誌における「単級」「合級」を

法 制 史	年度 (西暦)	単級学校数 (%)	単級学校 に関する 文献数	『教育時論』		『教育報知』	
				合級	単級	合級	単級
文部省令第8号 (小学校ノ学科及其程度)	明19 (1886)			1	0	0	3*
	20 (1887)			0	1	0	10*
	21 (1888)		2	1	1	1	0
	22 (1889)		1	0	0	0	0
(第2次) 小学校令	23 (1890)		1	0	0	0	0
文部省令第12号 (学級編制等ニ関スル規則)	24 (1891)		0	0	0	0	2
	25 (1892)	8120 (34.3)	2	0	5	0	1* 15
	26 (1893)	10138 (42.3)	4	0	5	0	8
	27 (1894)	10007 (41.6)	5	0	1	0	6
	28 (1895)	9038 (38.3)	2	0	5	0	7
	29 (1896)	8770 (37.2)	5	0	1	0	6
	30 (1897)	8140 (34.7)	1	0	0	0	1
	⋮	⋮	⋮	(補註) 1. 記事数は、あ (例えば「実験叢譚 単 信 香取郡単級授業法講 2. 例えば「単小学読本を 逸合級小学校」といった 3. 『東京若湊会雑誌』は と掲記したものは僅少な 4. 単級学校数、文献数は に記載のものを転記させ			
	35 (1903)	5776 (24.2)	2				
	⋮	⋮	⋮				
	40 (1908)	4920 (20.8)	2				
	⋮	⋮	⋮				
	45 (1913)	1665 (7.9)					

見出しとする記事数の推移

『大日本教育会雑誌』		備 考（*印の記事名，他雑誌の関係記事，主要著作等）
合 級	単 級	
1	0	*「独逸国ジュッセルドルフ県単級小学教則」及び「単級小学校 ケール氏教授論抄訳」
0	0	
2*	0	*「合級授業ノ方法 金沢長吉」 『日本独逸合級小学校』（木場貞長）
1*	2	「合級教授の学校 松本貢」（教育週報） 『単級教授法』（山田邦彦）
0	2	「合級教授法」（教育）
0	0	
0	2	*「単級教授ト合級教授トノ別 横山栄次」 『単級学校 附多級学校教授法』（原慶次郎）
0	0	
0	4*	*「大日本教育会単級教授法研究組合報告」 『単級学校ノ理論及実験』（高等師範学校附属学校編纂）
0	9*	文部省夏期講習会，単級教授法に関する黒田定治の講演（教育報知，埼玉教育雑誌）
0	0	
0	0	『実験単級小学校管理及教授法』（元山形県尋常師範学校訓導毛呂百人編纂）

くまでも見出しに「単級」「合級」と明記しているものを算出。但しサブタイトルまで含めた。級教授日誌」（教育時論258号），「教への庭 第一，単級小学校」（教育報知354号），「千葉県通習会之詳況」（教育時論385号）など）また連載記事は，連載回数を計上した。

特定すべき議」（教育報知460号）のように明らかに「単級」の略記と判るもの，「書評 日本独書評も数に入れた。

高等師範学校附属小学校の単級教場に関する記事が2～3あるのみで見出しに「単級」「合級」ので一応表からはずした。

宮田丈夫「単級学校の成立過程とその学校編制史的意義」（『教育学研究』第20巻第4号所収）で戴いた。

ドイツの学校（しかもその大部分は単級学校）紹介に関する記事は、枚挙に遑ない程である⁽⁵⁾。さらに明治27～8（1893～4）年頃になると実際にドイツに赴いて単級学校等を見聞した人達による回覧記が雑誌に掲載されたり、単行本として発刊されたりするようになる。例えば次の叙述はドイツ滞留中の波多野貞之助より明治26（1893）年に『東京若溪会雑誌』に寄せられたドイツの単級教授の実態に関する記事の一部である。

「単級教授ナド当地ニテ見ルガ如キハ別段六ヶ敷コトモナケレバ又面白キコトモナシニヶ年級宛合併ノ級ナルガ先ツ大体ノコトヲ申上候得バ宗教ノ課ニ於テハ其歴史ヲ同時同様ニ兩組ニ課シ独語ノ如トキニハ教師一組ニ教ヘ居ル間ハ他ノ一組ニ書取等ヲナサシメ了レハ兩組同時同様ニ綴リノ練習又ハ文法ノ練習ヲ行ヒ算術ニテモ初メ兩組同時同様ニ数ノ分解ヲ練習シ了テ他ノ一組ニ教科書ニ依リテ筆述問題ヲ与ヘ他ノ一組ニ教授ヲナス地理、歴史、図画、習字、唱歌、体操、等皆同時同様ニ課シ居候都合ニテ一向ニ発明シタルコトナシ只同時間ニ異ナリタル学科ヲ課シ居ルコトハ嘗テ見ズ今後村落ニ入テ八年ヲ真ニ単級ニテ教授スル所ヲ見度ト存居候」⁽⁶⁾

単級とは言っても実際は二級宛合併のいわゆる合級に過ぎないこと、但し同時同学科の方針で行われている実情等が紹介されているわけである。

また翌明治27（1894）年2月には金港堂より『巡覧特殊教授法 一名 単級及び半日学校めぐり』と題する書物が刊行されているが、これは湯本武比古が明治22（1889）年の9月ドイツに滞在の折に視察した学校、特に単級学校と半日学校について校舎施設、備品、都市部と村落部の状況の相違等、詳細に伝えたものである⁽⁷⁾。

このように第2次小学校令期においては、単級学校の法制上の成立にも呼応して諸外国、特にドイツの単級学校の紹介も本格化したと言えることが出来る。ところで先程の表にも明らかなように第1次小学校令期においては単級学校やその教則についての紹介がなされつつも依然「合級」と銘打つ記事がかなり多く、教授法等に関しても「単級」と「合級」の概念について未だよく整理されていない状況が窺えるのであるが⁽⁸⁾、第2次小学校令期に入ると専ら「単級」と銘打つ記事が、しかも急増していることが瞭然としている。そうした表面上の特徴は、それとして刮目に値することであるが、さらに第2次小学校令期の「単級」に関する記事の中味までを分析していくと、上述したように単級学校の紹介に関する記事とともに、それら諸学校の例を参照しつつ一体日本の単級学校における教授法等の実践はいかにあるべきか、という問題に論及している記事が極めて多いことに気づくのである。つまり当時の日本においては、法制上成立し、実態的にもかなりの比率を占めた単級学校における教育実践は如何にあるべきかが大きな研究課題とされ、その際ドイツ等の単級学校の実情等が紹介参照されつつも、ドイツと日本の国情や背景等の相違に着

眼し、それらを考慮したうえで日本における独自の展開の仕方が模索されていたということが察せられるのである。したがって以下、それら雑誌記事及び教授法書等を資料として、日本における単級学校の特に教授法における独自のあり方の模索と形成確立の模様について考察を加えることにする。

本論 わが国独自の単級教授理論の形成とその実態

1. 日本とドイツの状況の相違への着目

単級学校を法制上成立させた第2次小学校令及び文部省令第12号（学級編制等ニ関スル規則）公布直後の明治24（1891）年12月、『教育報知』に「単級小学校」と題する論説記事が2回連載されているが、そのなかに次のような文章の一節がある。

「純粹ナル単級教授トハ如何ナルモノナルヤソハ我邦現在ノ情態ニ於テ実行シ得ヘキモノナルヤ否及新小学校令ニ依リテ是非ニ設ケサルヘカラサル単級学校ニ於テハ必シモコノ純粹ナル単級教授ニ拠ラサルヘカラサルヤ否ナル問題ニ付キテ研究スヘキハ蓋シ目下ノ急務ナルヘシ」⁽⁹⁾

「純粹ナル単級教授」とはいかなる内容を意味しているのか、論者の意図するところを単級の理念に遡及し理解する必要があるが、実態的にはドイツに行われていたそれが念頭に置かれていたと解して差しつかえないであろう。すなわちいわばドイツの単級学校の実践をそのままわが国に移すべきなのか、否移しうるのか、というここに提起された問題はそのまま第2次小学校令期を通じてのわが国単級学校教授法の研究課題として尾を引いていくことになる。引き続き同論説においては、ドイツそのままの移入の行い得べくもないことが、諸々の理由において指摘されていく。ひとつは教科書の問題である。

「尋常科三年ノ修業年限ナル単級学校アリトセンニ其学校ニ於ケル読書若クハ地理歴史等ノ教科書タル何レモ皆同一材料ヲ用ヒタルモノニシテ只之ヲ記述スルニ繁簡難易ノ差アルモノ各三冊アルモノニシテ新入学ノ児童ト雖モ別段ナル教科書ヲ持タシメ他ノ児童ト同一ナルモノヲ持タシメテ而シテ之ヲ同一ニ教授スルニアリトス」⁽⁹⁾ といったドイツでの実践について論者は「余ハ以為コノ方法タル之ヲ他邦ニ行ヒ得ヘキニ我邦殊ニ現時ニ於テハ恐ラクハ行ヒ得サルコトナルヘシ」⁽⁹⁾ と断じている。その理由として僅か数十文字を学習すれば大抵の文章は読み解し得る言文一致の外国に対比してわが国は「其就学義務ヲ終レル者ト雖モ未タ以テ通常新聞ヲ朗読スルタモ難」⁽⁹⁾ いという言語（文字）事情の相違、それに加えて良教員にも乏しいというわが国の実情を挙げ、そのようなことからわが国の場合同時同科を志向しつつも「読書科」のみは殊にそれが困難であると述べられている。

さて、彼我すなわち日本とドイツの状況の相違への着目という点で明治26（1893）年1月発行の『教育報知』に掲載された「単級学校教授法」と題する論説記事は、さらに注目される。同論説は「一、緒言、二、学級及ビ多級単級ノ解説、三、我邦単級学校ノ編制、四、独逸国単級学校ノ編制、五、単級学校ノ部別、六、方向及配置、七、授業ノ種類 附補習科ノ事、八、教授草按、九、嚴重ナル躰方ノ必要、十、我国ト独逸国トノ比較、十一、単級学校ノ利害」との目次構成になっているが、ここでは特に三、四、十の各項が注目される。内容を概括すると「三、我邦単級学校ノ編制」の項においては「学制」期以来の等級制が「重ニ米國ノ制度ニ依リシモノ」⁽¹⁰⁾で学力、年齢に基づく分級法は教授上の利はあるとしても経済上、訓育上は不利であつて「明治十九年ノ改正令ニハ之ヲ矯正セント欲セシモ人民ノ感動未タ之ニ及ハス現今ニ至リ漸ク実施ノ運ニ達セリ」⁽¹⁰⁾と「学制」期以後の推移が簡叙されている。

次に「四、独逸国単級学校ノ編制」の項では1600年代から1800年代にかけてのドイツにおける学級編成の歴史が概略述べられている。すなわち1600年代は未だ学制が統一していなかったが1700年代に入つて分級を不可とする傾向が生じたこと、さらに1800年代に入ると「千八百年ノ始メニ至リ年齢ト学力トニ依リ分級スルノ可ナルヲ唱道セシカ其後千八百五十四年ニ至リ教育的ヨリスルモ経済上ヨリスルモ単級ヲ可ナリトスルノ論盛ニ起リ遂ニ普魯西ノ各小学校ハ単級学校ヲ以テ則正トスル制度トセリ但教授上ニテ組ヲ分ツコト、セシカ此制幾何ナラスシテ教育家ノ攻撃ヲ受ケ千八百七十二年ノ改正以来ハ単級学校ニ級及多級学校半日学校皆同等ノ位置トナレリ」⁽¹⁰⁾とある。このように日本とドイツの学級編成に関する歴史が概観されたのち「十、我国ト独逸国トノ比較」の項においては両国における単級学校での教育実践の背景に言及されている。先ずドイツにおいては「言文一致ナルカタメニ言葉ヲ吐ケハ即文章トナル故ニ我邦ニ比スレハ読方作文教授ノ困難ヲ見ズ」⁽¹⁰⁾といった言語事情に関わる教科教育の問題、次いで「教師ノ熟練セルモノ多キノミナラス氣力勃々考テ益壯事ニ当テ疲労セサルモノ多シ」⁽¹⁰⁾「教師ノ管理嚴重ナリ又生徒出欠ニ関シテハ嚴格ナル成規アリ」⁽¹⁰⁾など教師の実情が述べられている。一方わが国の方は、ドイツが8学年の単級であるのに対してせいぜい4学年の単級であること、教科目数がドイツに比べて少ないこと、ドイツは一教員80人の受持であるのに対してわが国は70人（尋常小学校の場合）であることなどによって余程容易である、と主として制度編成面のことが指摘されている。またそのことは「五、単級学校ノ部別」の項に詳述されている。すなわち部（組）分けについて例えばジュッセルドルフ県では1～2年（第三部）、3～5年（第二部）、6～8年（第一部）、ハルベタル師範学校附属小学校では1年（第三部）、2～3年（第二部）、4～8年（第一部）という具合に部（組）内の学年数が多いが、わが国の場合は3

ないし4学年制であるから、部（組）分けもほぼ学年別編成に近いと述べている。但し先程指摘した言語事情と関わってドイツでは「一人ノ教師ニテ八学年ノ生徒ニ教授スルモノナレハ読方科ノ如キハ年々同一ノモノヲ繰返スハ児童ノ嫌厭ヲ来スカ如クナルモ独逸ノ書籍ハ名家ノ文章等ヲ編纂セシモノ多キユヘ其意味ノ解シ方ノ如キ難易ニ依リ幾様ニモ解シ得ラルハヲ以テ幾回繰り返スモ興味減セス」⁽¹⁰⁾といった実情も紹介している。このように制度編成、教師、教科書等、様々の点において日本とドイツは事情の相違があり、したがって日本の単級学校での教育実践は、ドイツのそれをモデルとして参照しつつもそのままの移入は不可能と考えられたのであり、わが国の諸事情、諸条件を考慮しつつその独自のあり方が模索確立される必要があったわけである。このことは具体的には従来より行われていた合級教授の理論と実践を基礎とする形で、それとの関連において単級学校の教授法の理論と実践を確立していく、という形となって表われていくように思われる。「単級」に関する第2次小学校令期の論説の、その大部分が従来の合級教授との関連に言及しているのも、上述したような実践的要請が大であったことによるとみてよいであろう。したがって次に、それらの論説を分析することにより単級と合級の関係がどのように捉えられたのか、単級教授論の形成に合級教授の要素がどのように摂取されているか、について考察してみることにする。

2. 同時同学科主義（単級）と同時異学科主義（合級）の折衷

明治25（1892）年1月発行の『教育報知』における槇山栄次⁽¹¹⁾の論説「単級教授ト合級教授トノ別」は、標題そのものに示されるように単級と合級の関係を種々の点において指摘している。先ず両者の原理的關係（相違）について次のように述べている。

「蓋シ合級教授ナルモノハ元来分裂シアル数団体ヲ仮リニ集合シテ教授スルモノナレハ一人ノ教師ニテ教授スト雖トモ其形ハ数教師数団体ヲ教授スル有様ナリ単級教授ハ然ラス元来一団体ナルモノヲ教授上ノ便宜ヨリ仮リニ分割シタルモノナレハ数組合ニ分ルト雖トモ其形ハ一団体ヲ教授スル有様ナリ」⁽¹²⁾

このように級（等級）の集合（＝合級）と学級の分解（＝単級）という原理的相違を指摘したあと、その原理に則っての両者の教授法の相違について「合級教授ハ主トシテ異種ノ学科ヲ組合スルヲ務メ単級教授ハ出来ル丈ケ同時同種ノ学科ヲ授クルヲ務ムルナリ」⁽¹²⁾と説明している。特に単級教授の場合「一団体ト見做スカ故ニ差閤ナキ以上ハ同一事項ヲ授ケ同一材料ヲ用フルヲモアルヘシ」⁽¹²⁾として作文、算術の教授例が示されている。また「単級教授ハ各組共並行的ニ進ミ合級教授ハ継続的ニ進ムノ傾キアリ」⁽¹²⁾とも説明される。「並行的」とは同時進行的、「継続的」とは級毎に順次交互に、すなわち従来

「掛持法」とも称された合級教授の有様を示している、と言ってよいであろう。

楨山の論説にみたように単級と合級の教授法上の相違を同時同科あるいは同時異科と説明する仕方は、当時の他の論説等にもほぼ共通している。当時最大規模の教員団体であった大日本教育会のなかに、いくつか設けられた研究組合のひとつとして単級教授法研究組合が結成されたのは明治27（1894）年1月27日のことであった。石川重幸、川村理助、能勢栄、野尻精一、町田則文、鈴木光愛の6名を組合員とし期限一ケ年で毎月2回会合を開き研究成果を大日本教育会常集会で報告する、などの組合規約9箇条を承認している⁽¹³⁾。同年6月16～7日の両日、大日本教育会第11回総集會が開催され、会務報告のあと能勢栄が単級教授法研究組合の経過報告を行っているが、それによると発起人として上記6名の外、田中敬一、牛島常也、黒田定治、上野道之助、戸倉廣畔、丹所啓行、金子治善、多田房之輔が、さらに会員外の組合加入者として渡辺政吉、村田千熊を加えた計16名が発起人となっており、また研究項目及び担当者は次の如くであった⁽¹⁴⁾。

- | | |
|------------------|----------|
| 一．単級小学校の意義 | 協議会場にて決議 |
| 二．単級と多級との利害得失の比較 | 鈴木光愛 |
| 三．正教員と準教員との関係 | 石川重幸 |
| 四．生徒を補助すべき事柄 | 能勢 栄 |
| 五．単級学校管理法 | 町田則文 |
| 六．時間割の標準 | 田中敬一 |
| 七．単級学校教師の性格 | 能勢 栄 |

ところでこれはあくまでも当初予定の研究項目であって『埼玉教育雑誌』132号に掲載された報告によるとその後「単級教授と合級教授との区別」「器具の配置」の2項目が加わり都合9項目となっている⁽¹⁶⁾。さらに「引き継ぎ研究を為したる事項は単級小学校教授時間割雛形、単級小学校敷地及び校舎、単級小学校各学科教授の順序及び方法の数件」⁽¹⁵⁾ということであった。すなわち追加された研究項目のなかには、単級学校の実践上の諸問題が数多く取りあげられているわけであるが、そのひとつに「単級教授と合級教授との区別」についての研究がつけ加えられているところに、合級との関係（対比）に於いて単級教授の理念、概念、方法を明らかにしようとの研究の趣旨が窺われる。なお、同報告書においては単級教授と合級教授との原理的相違が次のように説明されている。

「従来の合級教授とハ一人の教師にして二学年以上の兒童に終始別々の教授を併せ施すものを云ふ。単級教授とハ一人の教師に全校の兒童に成るべく同一の教科目を同時に教授するものを云ふ。故に合級教授に於てハ教室內注意の方向ハ二三種に分るれ共、単級教授に於ては常に同一の方向にある者なり。」⁽¹⁶⁾

このように単級教授は一人の教師が全校生徒になるべく同一教科を同時に教授するものとしているが、具体的に「第八、単級学校時間割標準」⁽¹⁷⁾の項をみると、教科の性質により例えば修身、唱歌、体操は各組通じて同時同学科概同程度、作文、算術、習字、図画は同時同学科異程度、その他の学科は異学科組合せで止むを得ないとしている⁽¹⁷⁾。特に読書科などは教師の手数と発音とを要する学科であるから「同時に異程度にて教授するは可成組数の少きを宜しとす故に他学科と組合すの必要あり」⁽¹⁷⁾と述べ、具体例として「尋常四学年の単級学校に於ては第四第一両学年の読書と第三第二学年の習字と第四第一学年の習字と第三第二学年の読書と組合せ異程度にて教授する方比較的便利なり。」⁽¹⁷⁾と提案している。

このように同時同学科を志向しつつも学科の特質を顧慮して、その組合せ等について研究するということは、例えば『単級教授法』（明治22年、1889年刊）の著者山田邦彦においてもみられたように、合級教授法の改良という志向のなかで第1次小学校令期より盛んに行われてきたことであった⁽¹⁸⁾。第2次小学校令期に入ると上述してきたように「単級」と「合級」の関係（相違）が原理的次元において認識、説明されるようになり、そこから両者の教授法の相違が前者は各組（級）同時同科、後者は各級各別と説かれるが、実際の方法レベルにおいては各学科の特質等を考慮して同時同科あるいは同時異科組合せなどと検討がなされたことは上に見てきた通りである。したがって特に方法レベルにおいては従来（特に第1次小学校令期以来）の合級に関する教授法研究の成果が継承されたという様相が濃厚であると言えよう。

この間の推移について元山形県尋常師範学校訓導毛呂百人は、明治30（1897）年6月に公刊した『実験単級小学校管理及教授法』において、単級と合級の相違を「合級ニ於テハ、其ノ教授スベキ材料、各組ヲシテ統一セシムルコト少ナシト雖モ、単級ニ於テハ、可成各組ヲ統一セシムルヲ以テ本旨トセリ。」⁽¹⁹⁾と述べつつ、しかし両者は「其ノ教授ノ方法ノ異ナルハ、純然差異スベキモノニアラズ、漸次改良進歩セシ結果ニスギザルモノトス。」⁽²⁰⁾と指摘し、両者の関連と変遷を次のように捉えている。

「第一歩 合級教授法トシテ現ハレタルモノニテ、同時ニ異教科ヲ組合セ、専ラ異程度、異教材ニヨリ教授スルヲ以テ本旨トセリ。

第二歩 合級教授法ノ稍々進歩セルモノニテ、同時同教科ニヨリ教授スルモ異程度、異教授ヲ用フ、例ヘバ、作文科教授ニ於テ、各級各々其ノ文題、程度ヲ異ニセルガ如シ。

第三歩 単級教授法トシテ、初メテ世ニ現ハレタルモノニシテ、同時間ニ同教科ヲ教授スルノミナラズ、其ノ材料程度モ亦同一ニスルヲ本旨トセリ。

第四步 某教科ノ性質ニヨリ其ノ教授事項ノ繁簡難易ヲ酌量シ、彼此交代シテ教授スル

モノナリ。

第五歩 現時専ラ実行スルモノニシテ、以上四程度ヲ混合セルモノナリ。」⁽²⁰⁾

すなわち元来は各級各別異学科教授であった合級教授の、同時同学科を志向しての改良動向と、純粹理念的には同時同学科同程度を本旨とする単級教授法の、より現実化への動向とが融合しつつ現在の教授法が形成されていった、ということであろう。同著において著者は最後に「要スルニ、合級ト単級トハ、其ノ成立精神ニ於テ大ニ其趣ヲ異ニスレド、其ノ教授ノ方法ニ関シテハ、純然差異スベキモノニアラズ、合級ノ発達ニ、幾多ノ便宜ヲ与ヘタルニ過ギザルモノナレバ、本末ノ関係ヲ有スルモノト見做スヲ得ベキモノト知ルベシ。」⁽²⁰⁾と結んでいる。

3. 無等級（無学年制）の理念と等級制（学年別編成）の慣行の相剋

単級の理念に基づく具体的教授法として、ひとつは上述してきたように同時同学科主義が挙げられるが、その他単級教授を無等級（無学年制）教授として捉える捉え方も見られた。例えば埼玉師範学校教諭須永和三郎は『教育時論』284号（明26.3.5）に「単教授ノ一班」との論説を寄せ、そのなかで「従来ノ合級教授法ト単級教授法トノ區別」について次のように説明している。

「従来合級教授ト称スルモノニ於テハ、一教師ノ受持ツ所ノ生徒中ニ二個以上ノ級存セリ。故ニ教師ノ之ヲ教授スルニ当リテハ、各其級ニ相当スル学年ノ課程ヲ修メシムベキ筈ナルヲ以テ、其教授法モ亦従テ之ニ適シ、教師一方ノ級ニ、一学科ヲ教授スルトキハ、他級ノ生徒ハ、全ク教師ノ教授外ニ立ツノ有様ナリ」⁽²¹⁾。これに対して「単級教授法ニ於テハ、仮令ヒ其学級ヲ分チテ、数组トナスモ、其各組ハ決シテ級トシテ之ヲ取扱ハザルヲ以テ、一部ノ児童ニ、必ズシモ一学年ノ課程ヲ踐マシメザル可ラザルノ必要ナク、又二部ノ児童ニハ、必ズシモ二学年ノ課程ヲ踐マシメザル可ラザルノ必要ナシ。」⁽²¹⁾と述べ、「要スルニ単級小学校ニ於テハ、（四ヶ年ノ^(マ)科程）四年間ニ四学年ノ仕事ヲナサシムレバ可ナリ。是レ単級教授法ガ従来ノ合級教授法ト異ナリ、大ニ教授上ノ利便アル所以ナリ。」⁽²¹⁾と説明している。

また明治25（1892）年7月刊の『単級学校 附多級学校教授法』（原慶次郎編纂 文学社）中に次の叙述がある。

「単級学校ニ於テハ、教授ノ便宜ニヨリ、各府縣ニ定メラレタル教科課程ハ、確然墨守ス可キモノニ非ス（中略）要スルニ、単級学校ニ於テハ、修業年限中ニ一般ニ定メラレタル教科課程ヲ、悉ク履修セシムレハ可ナルモノニテ、学年ニ配当サレタル区々タル教科課程ノ如キハ、敢テ墨守スルニ足ラサルナリ、」⁽²²⁾

以上説明されているように、単級学校での教授が必ずしも学年毎（別）の教科課程に従う必要がなかったとすれば、例えば修業年限三年制の単級学校の教科課程も僅か一年で終えるということもあり得るわけで、実際にそのような事例も見られた。すなわち明治31（1898）年刊、小林憲一著『単級学校実践教授法』の「第四章 児童組分け法」の「備考」に、著者が兵庫県尋常師範学校附属小学校で行った実践例が紹介されている。少し長くなるが以下引用しよう。

「予が實際教授セシ児童ノ中ニ一女子アリ年齢十三歳ニシテ始メテ入学ヲ志望セシモノナリキ其父ハ車夫ヲ業トシ貧困ニシテ従来就学セシムル〓能ハサリシガ一日教育ノ大切ナル〓ヲ悟リ始メテ学ニ就カシメント思ヒ立チ本人ヲ携ヘ来リテ其事情ヲ陳述シ切ニ入学ヲ懇願セリ且曰ク生計極貧ナルヲ以テ一年間ヲ限り就学セシメン考ヘナレバ其間ニいろは四十八字ダケニテモ習ヒ得タランニハ大ニ満足ナリト予之ニ面シ熟々父子ノ情ヲ察スルニ父ハ真ニ誠意児童ヲ思フモノ、如ク子ハ真実ニ喜ビヲ以テ充タサル、カ如キヲ見レバ己レハ齡十三歳ニ達スルモ甘シテ六歳ノ幼童ト伍ヲ同フシ熱心ニ学習セント誓フモノト見ヘタリ予ハ父子ノ熱心ト篤実ナルニ感ジ大ニ喜ヒテ之レヲ諾シ手續ヲ了シテ入学セシメタリ而シテ初ノ日ニ其児童ノ心意発達ノ度ヲ試験シタルニ心意発達他ノ児童ニ比スレバ経験ノ久シキダケ頗ル発達セルモ文字ハ一モ知ル所ナク恰モ盲人同様タリ予ハ試ミニ之レヲ丙組（第一学年）ニ編入シタリ然レド特ニ此児童ニ限り餘裕アラバ常ニ乙組ニ於ケル課業ヲ併セテ学習スベキ〓ヲ許シタリ是故ニ文字ニ関スル〓ハ片仮名平仮名ヲ始メ其他上ノ組ニ教フル所ヲモ記憶シ算術ノ内暗算ノ如キハ常ニ甲組ト其力ヲ競ヒ習字ノ如キハ一生懸命ニ勉強シ全一ヶ月後ニ至リテ試験セシニ片仮名平仮名ヲ読ム〓同シク書ク〓及ビ綴ル〓等実ニ応用自在ナルニ至リ算術モ暗算ニ於テハ殆ンド千以下ノ数ハ自由ニ分解結合スルニ至レリ茲ニ於テ予ハ之ヲ乙組（第二学年）ニ進メ尚学習ノ餘裕アラバ甲組ノ課業ニ注意スヘシト命シタリ然ルニ此児童ハ甚タシク喜ビ一層奮勵シテ其後二箇月ヲ経テ試験セシニ総テノ学科ノ成績良好ニシテ同組生ノ首位ヲ占メ其学習シタル事項ハ悉ク自由ニ応用セラル、ヲ得タリ仍テ特ニ擢拔シテ更ニ之ヲ甲組（第三学年）ニ進メタリ其後益々勉強セシカバ学年ノ末ニ至リテ其成績良好ニシテ男女十八名中ノ第二席ヲ占メ茲ニ全ク一年間ヲ以テ修業年限三ヶ年ノ尋常小学校ノ課業ヲ卒業シ（當時其学校ノ修業年限ハ三箇年ナリ）証書（優等）ヲ受領スルニ至レリ其時父子ノ喜ヒ如何ハカリナランヤ貧困ノ為メ漸ク一年間就学セシメントシテ優ニ三箇年ノ課程ヲ卒業シ普通ノ筆算ニ不自由ナキニ至レルトハ況ンヤ之ヲ實際ニ手ニシタル予カ喜ヒ何物カ之ニ過ギンヤ」⁽²³⁾

そして最後に「此時ヨリ予ハ真ニ単級小学校ノ独特ナル点ヲ悟リ益々趣味ヲ感スルニ至レリ」⁽²³⁾と感想を付している。単級教授の実践例としてこのように三カ年の教科課程を一

年間で終えるなど、注目すべき実践もみられたわけであるが、しかしこのようなことはむしろ異例な出来事であったと見るべきであろう。

「単級小学校」と題する『教育報知』の論説においては、単級について「之ヲ真正面ヨリ解釈スルトキハ年齢ノ相異ナレル智力ノ同一ナラサル児童ヲ集メ別段等級ヲモ附ケシテ之カ教授ヲ為スモノ」⁽²⁴⁾すなわち純粹に解釈すれば「無等級教授」ということになる。と述べたあと、「然レトモ如此コトハ到底之ヲ行ヒ得ヘキニアラス仮令之ヲ行ヒ得ルトスルモ成ルヘクンハ之ヲ避クルノ必要ナルヲ信スルナリ」⁽²⁴⁾と述べられている。同論説はさらに続けて「然ルヲ以テ単級教授ヲ成サントスルモノハ勢合級教授ノ方法に依ルニ至ル」⁽²⁴⁾と述べ、具体的には学級内の組分けについて、従来の「年級」（等級）をそのまま「組」に替える案を提出している。先に紹介したが、単級と合級の原理上、教授法上の相違を説いていた横山栄次の論説においても、単級教授について理念的には無等級（無学年）制と捉えつつも実際は修業年数（学年）等に拠って数组に分つので「是ニ於テカ其為ス所從來ノ合級教授ト相近キ所少カラス」⁽²⁵⁾と結論づけている。

このように単級教授は、理念的には無等級・無学年制原理をも包含していたと言えようが、実際の形態上は学年（年級）に拠る学級内の部（組）分け等により従来の合級教授と極めて類似したものであったであろうし、また従来の長きに亘る等級別編成の慣行から単級等の編成が阻まれるという状況さえもみられたようである。「……学級編制規則ハアリナガラ、人数ノ少ナキニモ拘ハラズ、一学年必ズ一学級ノ編制風容易ニハ止マズ、将来尚実ニ世話ノ多キコトナラン。」⁽²⁶⁾とは明治29（1896）年頃に至っての状況についての山田邦彦の観察である。いわゆる無等級（無学年制）の理念を含んだ単級等の学級編成は、等級別編成の慣行により根づき難いばかりか更に強硬な反対論にも逢着しなければならなかったようである。

明治26（1893）年1月発行の『教育時論』280号に「学級編制廃止の建議」と題する記事がある。それによると、「大津氏が一千餘名を代表して文部省に建議せんと奔走しつゝある」⁽²⁷⁾ところの建議とは「学級編制を廃して学年別教授となすの件」というもので、その論拠は次の如くであったという。

「修業年限内に数個の階級を設け以て学力の進否を判然たらしむるが如きは、尤も適当なる一の奨励法にして、其学力と其階級と最も適当せるときは最も効力あり。然るに全校児童若くは数学年の児童を合せて一学級と為すときは、児童進否の階級其数を減じ児童をして前途遼遠を厭ふの情を生ぜしむるものとす。」⁽²⁷⁾

ここに述べているまさに「数個の階級」を設け学力の進否を判然たらしめることによる学力「奨励法」に則った制度こそ、国民の開化啓蒙、知育を最重視した「学制」期の等級

制であり、それを支える教育観であるが、明治20年代に入って知育よりも徳育重視へと思潮動向が変化し、そうした背景のもとに「学級制」学級編成が形成されつつあった時期にこのように従来の等級制保持の立場からの強固な抵抗があったことは注目に値することであると見えよう。

なお、「学級制」学級編成をめぐる上述の如き確執は、具体的には修業証書と学習証書の得失をめぐる問題としても展開された。法令上の「単級」の把握をめぐって、明治26（1893）年半に山田邦彦と教育時論記者との間に論争が行われたことについては拙稿（註（1）参照）でもすでに述べているが、その論争のなかにこの修業証書と学習証書の問題に触れた部分があるので紹介しておこう。すなわち無等級理念を内包した「学級制」に拠るならば毎学年終了時に修業証書を与えてきた従来の慣行、「此年々区切りノ良習慣ヲ破ラザルヲ得ザル」ニナルナリ。」⁽²⁸⁾との教育時論記者の批判に応えて山田邦彦が次のように反論している。

「年々修業証書ヲ与ヘ来レル事ノ如キハ、教員生級ハ勿論、父兄ニ至ル迄、之ニ慣熟シ、一方ニハ教授ノ整頓トナリ、一方ニハ習学ノ奨励トナレル事、明白ナルニ、一朝之ガ劇変ヲ為スニ於テヲヤ。故ニ彼ノ課程を卒れりト云ハズシテ、何ダカ知ラヌガ、一年だけは稽古をしたト云フ証書ノ如キハ、生徒及其父兄ハ勿論、当局ノ教員ニテサヘ、之ヲ嫌フ者多ク、恰モ簡易小学校ト云ヒシ名ノ影響ヲ再ヒ見ルガ如キ模様ナキニアラズ。小生ハ、曾テ此事ニ付テ、説キテ云フヨウ、仮令同学年ノ児童ヲ一学級ニ編制シ、又ハ単級学校ナリトモ、其教授ニシテ、純粹ノ単級法、即チ異生徒ニ同程度同時教授ノ方法ヲ施スニアラズシテ、是迄ノ合級法、即同時各程度（重ナルモノニ付テ云フ）教授ノ方法ニ依レルモノナラバ……」⁽²⁸⁾

すなわち単級学校あるいは数学年合同の授業でも「純粹ノ単級法、即チ異生徒ニ同程度同時教授ノ方法」を施すのではなく「同時各程度」すなわち従来の合級と同様に各学年に相応した程度の課程を行うのであるから、結論として「学習証書トヤラハ、無用ナラン。無論従来ノ修業証書ヲ与ヘテ、差問ナキ筈ナリ。」⁽²⁸⁾と述べているのである。

このように単級教授は純粹理念的には無等級という理念において理解され、学年毎の教科課程に拘束されない実践も一部には見られたのであるが、等級制の慣行の壁は厚く、また単級学校等においてはその部（組）分けが年級（等級）に拠ってなされたというのが大方のようであり、したがって無等級（無学年）制は実質的にも実現されなかったとみてよいであろう。

以上、第2次小学校令期に入って本格的に紹介導入された単級教授法は、級概念に遡って理念的に捉えれば、ドイツでの実践に照らし、同時同科（同程度）教授、無等級（無学

制) 制として理解されたのであるが、日本とドイツの事情の相違、慣行等から、ドイツのそのまゝの移入は不可能とされ、したがって従来からの合級教授と折衷された、むしろ合級教授に近い形態が行われた、というのが実情のようである。ところで上述の論証は主として雑誌の論説記事や教授書等に資料を求めているの考察であり、いわば理論のレベルに於ける様相であると言えよう。最後に、学事報告等を手掛りにして単級教授の実態について一瞥しておきたい。

4. 単級教授の実態

単級教授の実態については、教育雑誌等に掲載された学事報告や師範学校長等の談話等において、およその輪郭を把握することができる。一、二例を挙げると「教授法中最其宜しきを得ざるものを、単級教授法となす。今の単級教授法は、概ね真の単級教授法にあらずして、合級教授法なり。単級教授法にして、其宜しきを得ば、単級学校の成績恐らくは、多級学校に劣らざるべし。之が改良を計るは、目下の急務ならん。」⁽²⁹⁾ (傍点ママ) との寺田勇吉参事官の談話、或いは「単級学校の単級教授は、大率合級教授にして、独乙風の単級教授は、全く行はれ居らざるものゝ如し。」⁽³⁰⁾ との福岡師範学校長小泉氏の談話等に表示されるように、純粹理念的な、独乙風の単級教授は殆んど行われておらず、概ね従来の合級教授と大差ない実情が窺える。某地方視学は、明治31 (1898) 年頃の視察状況報告のなかで「又単級に編制したる学校及、甲乙両学年以上を、一学級に編制したる場合の教授法は、未だ充分普及せずして、純然たる往日の合級教授をなし居るもの多し、」⁽³¹⁾ と述べ、その具体的実状について「毎日同時間に同教科を課するは、脳力の傾向上極めて経済なれば、尋常科の如く教科数の少なきものは、可成時間の配当を画一にするを可とするに、斯る点に注意するもの少し。」⁽³¹⁾ とか「単級編制若くは二学年以上を、一学級に編制したる場合の時間割は、通常読書と習字若くは図画を組合せ、他は可成同時とし必ず一組のものとして、其の関係を一覧し得るやう、編制し置かざる可らず、然るに一般に組合せ方の不適当なるは、是れ此の場合に於ける教授法の、普及せざるか為めなるべし。」⁽³¹⁾ と述べている。

単級教授の実態を、より詳細に伝えるものとして野口援太郎が『東京茗溪会雑誌』に寄せた「京都府竹野郡教育ノ有様ノ一斑」を最後に紹介しておきたい。同記事は先ず「全郡中、小学校ノ数高等四尋常二十二外ニ分校二都合二十六校ニ分校アルモ此中多級学校ハ僅ニ四ヶ校ニシテ中四学級ノモノ一、三学級ノモノ一、二学級ノモノニシテ高等小学校ノ如キハ盡ク単級組織ナリ」⁽³²⁾ と単級学校の数量的実態を述べたあと、その教授法の実態を教師の意識等にまで立ち入って次のように報じている。

「単級小学校ノ名目ヲ有スル学校ハ至ル所ニ見ルニ得ベシト雖トモサテ其実際執レル

所ノ方法トハ觀シ来レハ所謂合級教授法ノ拙劣ナルモノニ過ザリキ試ニ教員諸君ニ問フニ單級教授ノ「」ヲ以テスルモ彼等ハ不知ノ一語ヲ以テ答ヘシ「」通例ナリキ或学校ニテハ雇助手ヲ使用シニ學級トシテ教授ヲ施シ居レリ要スルニ單級學校ノ名目ヲ有スルモ其組織性質ハ如何利害ノ点ハ如何ナド云ヘル明了ナル思想ハ殆ト求ム可ラズ恰モ暗中ニ物ヲ探ルガ如キ有様ニシテ或人ハ單級學校ト貧民學校トヲ全一視シ窃ニ之ヲ愧ツルノ心アリシト云ヘリコハ我高等師範學校附屬單級學校ヲ參觀シテ歸リタル一教師ガ其組織ノ如何ニモ貧民的ナリシヲ見テ其狀況ヲ語リシニサテコソトテ己前ヨリ其關係ニツキテ疑ヲ抱キタルヲ一層確メタリト云フサレハ我高等師範學校附屬單級學校ハ其組織ヲ改ムル迄ニ至ラザルモ能ク其來歴ヲ知ラシムル手段ヲ取ラザレバ田舎出ノ教師ニ誤解セラル、恐ナキニシモアラザルベシ」⁽³²⁾。すなわち單級の趣旨がよく教師に理解されていないこと、單級學校が貧民學校との誤解を招いていたこと（尤もこの点については上記報告にもあるように貧民兒童を集めて組織した東京師範學校附屬單級學校の特殊性からそうした誤解を招くことも無理のないことではあったが）など教師の單級についての受け取め方が記されている。

次に各學校の書籍等の具備狀況の貧困なことについて「教科用書ヲ除キテ參考用書籍等ニ至テハ其類極メテ僅少ニシテアル一ニ學校ノ外近時ノ發兌ニカ、ル教育書ノ如キ絶エテ見ル「」能ハズ只ノルゼントヘ「」ジノ教育論及ケールノ平民學校論略位ノコトニシテ之サヘ閱讀スルモノトテハアラザルベシ教育雜誌ノ当郡ニ來ルモノ余ノ見シモノニテ教育時論一部全報知一部位ニシテ教員ノ私宅ニハ多クアルカハ余ノ知ル所ニアラザルモ兎ニ角極メテ少キハ余ノ斷言スル所ナリ」⁽³²⁾と述べ、「サレバ余ハ大ニ其必要ヲ奨励シ且ハ各學校ヲシテ「單級學校ノ理論及實驗」一部宛購求セシメマタ避暑講習會ニ用井ル根氏教授論モ各校一部宛購求セシムルコトニ定メテ管理者ニ其相談ヲ遂ゲタリ」⁽³²⁾と希望を述べている。最後に單級學校の教授管理に関する講習會開催の模様を次のように述べている。

「余ハ着任早々郡内ノ有様ヲ一見セバヤト主任郡書記ト共ニ急行一巡回ヲ終リ然レ後教員管理者學務委員ヲ召集シ其席上ニ於テ我巡視上ノ所感ヲ述べ後來ノ方針ヲ語り且ツ執務上ニツキテ如何ナル方法ヲ取ルベキヤヲ諮問シ其結果トシテ先ツ單級學校ノ教授管理ノ「」ニツキテ講習會ヲ開クコト、シ午前ハ各校ヲ巡視シ午後ハ最寄ノ學校ニ於テ其講習會ヲ開キ一時ヨリ五時ニ至リ三日ニシテ其大体ノ講習ヲ終リタリ（一ヶ處三日ニシテ全郡ヲ五部ニ別チタレバ十六七日ヲ要セリ）」⁽³²⁾

以上いくつか掲げた單級教授の実態を示す資料は大方の全国的な実態を示すものでもあるとみてよいであろう。

最後に本稿の内容を要約しておきたい。第2次小学校令期において法制上成立した單級學校における教授法のあり方は、教授法に関する当時の大きな研究課題であった。そして

ドイツを主とする諸外国の単級学校の紹介も本格化するなかで、わが国単級学校の教授法は、一方ではそれらを参考としつつも、またわが国の教育事情や背景等を考慮し独自に形成されなければならなかった。したがって原理的には兎も角も、実際の教授法においては、従来の合級教授法的要素が大幅に摂り入れられるという結果になっていったのである。すなわち、単級の理念を把持しつつも実際の方法においては合級教授との折衷をはかる——このことが第2次小学校令期における単級教授法のいわば理論レヴェルでの課題であったと言える。それがさらに実態のレヴェルということになると最後にいくつかの資料を示したように大方は従来の拙劣な合級教授の域を出るものでなかったとの結論が下せるようである。このようにわが国の第2次小学校令期における単級教授論の移入と展開は、理念、方法理論、実態という各レヴェルによって、その様相を異にしていたとみてよいであろう。

註

- (1) 第1次小学校令期における単級学校、単級教授法に関する論著の分析については拙稿「単級学校教授法の形成過程における第1次小学校令期の位置づけ」(『弘前学院大学・短期大学紀要第16号』1980年3月)を参照されたい。本稿はその継続研究の一部として第2次小学校令期の単級教授論について考察するものである。
- (2) 「単級小学校 ケール氏教授論抄訳」においては、半日学校と単級学校の得失をめぐるドイツにおける論争動向が紹介されている。当時ドイツにおいては単級学校に対して等級別にすべきだとか半日二部学校にすべきだといった論(例えばゴルツシュの『郷学校の編制策及び教案』など)もあったが、道徳上、教育学上単級学校の利を主張する意見も優勢であったとし、その理由を挙げている。先ず第1の理由としては、半日学校にすると児童は不良な遊戯に興じたり労働に使役されるということ。第2に学力面において単級学校においては「演習実行シテ読書親カラ知識ヲ練磨セサル可カラサルカ故ニ其結果習字算数等ノ機巧ハ却テ半日学校ノ生徒ニ勝ル可シ」(教育報知82号 12頁)と、また年令や性質の異なる児童が「相互ニ競テ奮勵スル勢力ハ其精神上ノ發育ニ非常ニカアル作用ヲ起ス者ナリ」(同上)と単級学校の精神発達面での利をも指摘している。83号も同様に、半日学校の反対論者の一人、学務議員ケル子ル氏の著書『小学校論』を紹介する形で児童の心身の發育という点からも半日学校より単級学校の方が優ると再度強調している。そして単級学校の教師は心理学に通ずべきなど種々の要件を述べたあと、その実情を次のように述べている。「独逸国中単級学校ノ数甚タ多ク枚挙ニ暇アラサルナリ然レトモ之カ教師中ニ充分ナル才智ヲ以テ能ク理論ニ合シ巧ミニ實際ニ適切ナラシメ学校ヲシテ其本色ヲ見ハシ其本分ヲ尽サシメタルモノ果シテ幾人カアル其数ノ寥寥タル晨星モ啻ナラサル可シ是最モ嘆ス可キナリ」(教育報知83号 10頁)。以下84〜6号においては単級学校の時間割例等が掲記されている。
- (3) 例えば愛媛県師範学校附属小学校での実践について「同校ハ目下単級多級ノ二種ニ區別シテ教授セリ。単級ハ客年九月始メテ設置シ、本県ノ状況ト傍ラ独乙国「ジュッセルドルフ」県単級小学教則ニ拠リ編制シタリ。…(会員下村純忠君報)。」(「附属小学校」『愛媛教育協会雑誌』1号、明治20年7月刊、『明治前期教育関係史料 第1輯』愛媛近代史料 No. 20、所収 8頁 傍点引用者)との報道などがある。
- (4) 「社説 明治廿三年を送る」『教育報知』248号(明治23・12・27) 3頁。
- (5) 明治22〜4(1889〜91)年頃のドイツ等の学校事情を紹介した記事を列記してみると次の如くである。「独逸の村落学校」(教育時論162号),「無等級学校」(同179号),「独逸の学校」(同191〜4号),「独逸国小学校」(教育報知240, 242, 244号),「独逸国の学校 寺田勇吉」(教育時

論217～8号),「独逸の教育一般」(同前),「独逸学校の景況」(教育報知263号),「普魯西国小学校 附師範学校 寺田勇吉」(同269号)

(6) 「在独逸国波多野貞之助君ヨリノ通信」『東京茗溪会雑誌』125号(明26・6・20)13頁。

(7) 同書によると、湯本が主として視察したのは中シレシア州ゼクシッシェ、ハウグスドルフにて2個の単級学校、同州シレジッシェ、ハウグスドルフにて1個の半日学校、同州パンテナウにて1個の単級学校、同州コールフルトにて1箇の単級学校、その他であった。(5～6頁)それらの校舎設備の様様について同書に次の叙述がある。

「今、予が視たる単級学校、及び半日学校の、校舎の一般の有様を記さんに、孰れも八十人左右の生徒を容るべき教室一箇と、教師の住ふべき二三の室あるのみ、此の他には、小使と曰ふ者なければ、小使室もなく、生徒の控所、湯呑場と曰ふべきものもなく、器械教具室と曰ふべきものもなし、其の様、本邦、往時の手習師匠の家と異なる所なし。」(7頁)

次に1872年の通則に拠る小学校に備え置くべき教授用品として以下のものが列挙されている。

①其の学校にて採用せる教科書一部宛。②地球儀。③其の州の地理学用掛図一軸。④独逸全国の地理学用掛図一軸。⑤パレスチナの地理学用掛図一軸。⑥理化博物用の掛図数種。⑦初学読方用の二十六字掛図。⑧胡弓一個。⑨定木及び分廻し。⑩算術用器具。その他、新教の学校に於ては⑪聖書一冊。⑫その地の教会にて用ふる讃美歌一冊。(10～11頁)。以下第三章は「単級及び半日学校に関する諸法令の概要、並びに各種の時間表及び級の組方」と題し、1872年10月15日ドイツ国教務大臣ファルクの学校通則、単級学校の時間割、一級学校から八級学校までの級の分け方等が記載されている。第七章「結論」の章においては1882年と1886年における各学校種別数の内訳を都会地と村落地に分けて以下のように表示している。(131～3頁)

学 校 の 種 類	1882年	1886年
単 級 学 校	23071	23152
内 半 日 学 校	(2989)	(5409)
二 人 教 師 学 校	5406	5714
内 三 級 学 校	(1847)	(2684)
多 級 学 校	4563	(5150)
総 計	33040	34016

この表をみると、1880年代のドイツは、単級学校数の微増がみられるものの明らかに多級化の傾向にあることが窺える。全体としてはそういう傾向にありつつも都会地においては単級学校数もかなり増加していることも見逃がし得ない。

都 会

学 校 の 種 類	1882年	1886年
単 級 学 校	493	653
内 二 人 教 師 学 校	322	365
多 級 学 校	2524	2700
総 計	3339	3718

村 落

学 校 の 種 類	1882年	1886年
単 級 学 校	22578	22499
内 二 人 教 師 学 校	5084	5349
多 級 学 校	2039	2450
総 計	29701	30298

- (8) 註(1)掲出拙稿参照。
- (9) 「単級小学校」『教育報知』293号(明24・12・12)7頁。
- (10) 「単級学校教授法 白河 小野生寄稿」『教育報知』351号(明26・1・7)8～10頁。
- (11) 横山栄次の略歴。慶応3(1867)年4月、山形県米沢に生まれる。米沢中学を経て山形師範学校を明治19(1886)年卒業、小学校教員に従事。明治21(1888)年高等師範学校文科入学。同24(1891)年卒業後、秋田県尋常師範学校教諭、翌25(1892)年附属小学校主事。明治26(1893)年高等師範学校助教授。以後、文部属、宮崎県尋常中学校教諭、秋田県師範学校教諭、北海道師範学校長、女子高等師範学校教授兼附属小学校主事等を歴任。明治38(1905)年、教育学及び教授法研究のため独米に留学。明治40(1907)年帰国後文部省視学官。大正2(1913)年文部省督学官、同5(1916)年奈良女子高等師範学校教授、同校々長となる。主著は『教授の段階に関する研究』、『教授の理論及実際』、『学校管理法』、『小学校の初学年』、『小学各科教授法』、『教授法の新研究』、『現今教育の理想』、『教育教授の新潮』等、教授法に関するもの多数。(『明治大正昭和思想学説人物史 第一巻』藤原喜代蔵 昭和17年 694～5頁。『日本之小学教師』第1巻第4号43～4頁「横山栄次自叙の伝」参照。)なお後者「横山栄次自叙の伝」においては彼が明治19(1886)年8月訓導として赴任した山形市五日町なる東部進修学校の模様について次のように叙した部分がある。「此校は市の一隅に在りて、長さ四五間、幅三間許なる一小矮屋なり。生徒の数は僅か七八十名にして、教師は余の外に一名の授業生ありしのみ、今日ならば単級の編制をなすべき所なれども、当時はさる方法も見出されず、学年毎に級を立て合級の仕組にて教授したりき。入り来る児童多くは貧家の子弟にして、身辺の不潔なる挙動の乱暴なる、余をして呆然たらしめたること屢なりき。甚しきに至りては、室内に於て放尿するものさへ往々にして無きに非ず。此時余は漸二十歳なり。弱年の教師経験もなく、技倆もなく、唯厳刻なる方法にて、之を矯正せんと力めたりしも、思はしき効果も見えず、天職なり楽地なりとして入り来りし教育界も、嫌厭の念転た禁ずることを能はざりき。」(44頁)
- (12) 「単級教授ト合級教授トノ別 秋田 横山栄次」『教育報知』300号(明25・1・30)4頁。
- (13) 「単級教授法研究組合規約ノ承認」『大日本教育会雑誌』140号(明27・2)37～8頁。
- (14) 「大日本教育会第十一回総集会」同上誌150号(明27・6)14～6頁。
- (15) 「大日本教育会単級教授法研究組合第二回報告書」『埼玉教育雑誌』140号(明28・5・5)15頁。
- (16) 「単級教授法研究組合に於て研究したる事項」同上誌132号(明27・9・5)24～5頁。
- (17) 「同上(承前)」同上誌134号(明27・11・5)6～8頁。
- (18) 註(1)掲出拙稿参照。
- (19) 『実験単級小学校管理及教授法』(元山形県尋常師範学校訓導毛呂百人編纂 明治30年6月刊 有斐堂)5～6頁。
- (20) 同上書 6～7頁。
- (21) 「単級教授ノ一斑 須永和三郎」『教育時論』284号(明26・3・5)22頁。
- (22) 『単級学校 附多級学校教授法』(原慶次郎編纂 文学社 明治25年7月刊)3～4頁。
- (23) 『単級学校実践教授法』(小林憲一著 教育書房 明治31年刊)34～6頁。
- (24) 「単級小学校」『教育報知』291号(明24・11・25)1頁。
- (25) 註(2)と同じ。4頁。
- (26) 「小学教育改正概論 山田邦彦」『教育時論』389号(明29・2・5)16頁。
- (27) 「学級編制廃止の建議」同上誌280号(明26・1・25)30頁。
- (28) 「耳を払って聞け文部の当局者 二就テ時論記者机下へ 山田邦彦」同上誌295号(明26・6・25)15頁。なお修業証書と学習証書について例えば宮城県の場合は次の如き授与法が実施されていた。「我宮城県小学校教則第三十条に曰く小学校長若くは首席教員は学年の終に於て児童の学業及行状

の成績を考へ其相当の進歩をなせしことを認定するときは左の例に依り証書を授与すへし

同学年の児童を一学級に編制したる場合及数学年の児童を一学級に編制したる場合に於て其学級に該当する学年の課程を修業したりと認定するときは第二号書式（修業）の証書を授与すへし

数学年の児童を一学級に編制したる場合及単級の学校に於てハ一ケ年間課業を学習したる者には第三号書式（学習）の証書を授与すへし」（「学習證書授与法ヲ論ス。宮城 木村宗稿」『教育報知』382号 明26・8・12 12頁。）

(29) 「教育家の注目すべき事項 寺田勇吉君口話（社員筆記）」『教育時論』351号（明28・1・15）12頁。

(30) 「福岡師範学校長小泉氏の談話」同上誌364号（明28・5・25）36頁。

(31) 「学事視察に関する意見。栃木県地方視学 鈴木龟壽」『教育報知』584号（明31・5・25）18～9頁。

(32) 「京都府竹野郡教育ノ有様一斑 野口援太郎」『東京茗溪会雑誌』138号（明27・2・20）4～8頁。なお同年の中頃に京都府竹野郡の学事諮問会が開催され、その議題中に「十、真正なる単級教授を実施すべし 一、単級教授には工夫の一層必要なことを忘るべからず」と単級教授に関する件が二項含まれていたことも、同郡の単級教授の実態を窺わせる一資料と言えよう。（「京都府竹野郡学事諮問会」『教育報知』431号 明27・7・21 19頁）

（1980.10.27 受付）